

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21710258

研究課題名

（和文）開発実践の副次効果と住民活動の創造的展開—タンザニアにおける農村開発の事例

（英文）The Side Effect of Development Challenges and People's Creative Responses:
A Case Study of a Rural Development Project in Tanzania

研究代表者

黒崎 龍悟（KUROSAKI RYUGO）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90512236

研究成果の概要（和文）：本研究は東アフリカ、タンザニア南部の住民参加型農村開発プロジェクトに焦点を当て、開発プロジェクトを推進する側が意図しない、いわば「副次効果」とみなされていた部分にこそ住民の主体性・創造性が反映されるとの考えにたち、その実態を長期的視点に基づいて明らかにすることを目的とした。その結果、とくに定性的な部分において、従来の評価手法では明らかにならなかった地域住民の動きが見出され、「副次効果」への着目が、地域の内発的発展をとらえる視点につながることを実証的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study's primary aim was to clarify people's responses to challenges in rural development by using the case study of participatory rural development project in southern Tanzania. This study focused on the side effect which the project planner did not intend to occur in understanding the people's creative responses. As a result, especially in the qualitative aspect, some remarkable effects became apparent with factual evidence. To deepen an understanding towards the side effect has led to a comprehensive perspective in capturing the essential features of endogenous development in rural communities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：新複合領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：東アフリカ、実証的研究、質的研究、農民グループ、在来性

1. 研究開始当初の背景

グローバル化とともに進展する市場経済化の波は、アフリカの農村地域においても従来の生活様式を根底から揺るがし、複雑化した貧困問題を生じさせている。こうした問題の解決に向けた農村開発の取り組みは重要

性を増しているが、アフリカにおける農村地域の生態・社会環境は多様であるため、汎用的・画一的な開発手法では地域の複雑な実態に対処しにくく、また持続的な発展も望めない。この状況を改善するためには、現時点でみられる農村開発への住民の対応に着目し、

住民の主体的な活動展開を草の根レベルで明らかにし、そこから新たな開発実践への示唆を得る作業が必要である。

開発援助機関などによる開発プロジェクト等の評価は、対象社会を定量的に網羅するベースライン調査やインタビュー・観察などの定性的手法を駆使することが求められるが、それらは費用と手間・時間がかかるために実際は収集しやすい定量的データをもとに実施計画をなぞる評価が主流となっている。こうした評価の取り組みは結果として対象とする農村開発のインパクトの詳細をとらえることができていなかった。

報告者は、これまでのタンザニアにおける調査を通して、農村開発のインパクトが農村社会の在来性を刺激し、開発を進める側が予想していなかったタイミングや形で、住民主体の新たな活動が展開しつつある様子を観察した。こうした、いわばプロジェクト活動の意図していなかった効果＝「副次効果」にこそ、住民の主体的な対応と彼らの創造的な工夫が具現化されており、それを長期的な視点で解明して開発実践へとフィードバックしていくことが、地域の持続可能な発展につながるとの認識に至り、本研究に着手した。

2. 研究の目的

この研究では、タンザニア、ムビンガ県 K 村で実施された JICA (国際協力機構) と国立ソコイネ農業大学による住民参加型農村開発プロジェクト (1999-2004 年実施) に焦点を当て、プロジェクトの「副次効果」の実態を明らかにすることを目的とした。「副次効果」の表れ方については、とくに以下の 3 点に着目しつつ定量的・定性的データを収集した。

- (1) 「数」にあらわれない農民グループ活動の効果
- (2) 外部諸アクターとの相互作用がもたらす意識面での変化
- (3) 平等規範との関連

3. 研究の方法

- (1) タンザニアに渡航し、ムビンガ県 K 村およびその周辺地域においてポスト・プロジェクトの実態調査をおこなう
- (2) K 村およびその周辺地域の住民、県行政官、NGO、援助ドナー等と協力して、報告会・現地ワークショップを実施し議論を深める
- (3) 研究成果を学術論文、ホームページ、学会発表、国際ワークショップ、著書、所属する国内 NPO をとおした講演活動のかたちで公表する

4. 研究成果

- ① 「数」にあらわれない農民グループ活動

の効果

従来、農村開発におけるグループ活動の評価は、活動の種類数、メンバー数や、メンバーの属性とグループ活動の経済的成功の相関などから評価される。しかしながらプロジェクト終了後には、複数のグループが県政府に働きかけて資金を調達し、プロジェクト期間中に実施した水源への植林 (水源涵養林) と結びつけて自主的に全村規模の水道ラインの敷設に取り組みはじめていた (雑誌論文②③④、学会発表④⑤)。

また、現在進展している地方分権化の下の開発政策との関連に注目して調査したところ、地域住民は前プロジェクトの経験を活かして住民グループを再編成し、開発政策によってもたらされる資源を効率的に地域社会内に普及させるシステムを形成していたことを明らかにした。(学会発表②)

こうした事例から、グループ活動をとおして得た経験が、グループとしての形態を保持せずとも、プロジェクト終了後やプロジェクト活動とは別の文脈において生きてくることを明らかにした。

- ② 外部諸アクターとの相互作用がもたらす意識面での変化

質的な評価においては、意識面での変化もひとつの重要な指標として考えられる。特に、開発援助ドナースタッフや県行政官、他村からの訪問者などの外部アクターとの相互作用や、そうした人びとによる評価が、住民による持続的な活動遂行のモチベーションにどのように影響するかを明らかにすることは重要である。本研究では、農民交流や公的な場における地域住民の発言や行動を参与観察することによりこの課題にアプローチした。地域住民がこれまでの活動を通して自信を培い、自分たちのやってきたことに対して誇りを持ち、それが新たな活動への原動力となっていることを明らかにした。(雑誌論文⑦、図書①)

- ③ 平等規範との関連

これまで、東アフリカ農村社会においては、特定の世帯が極端な窮乏状態に陥らないようにするための平準化の仕組みがあることが指摘されてきた。本研究では、個人、グループレベルでの住民同士のやりとりを長期的に追うことで、こうした地域社会に内在する規範が、農村開発のような外部からの働きかけに相乗効果をもたらすか、あるいは桎梏となるのかをも明らかにしようとした。その結果、上記の普及システムの形成に見られたように、地域住民は、新しい活動を地域社会の成員の多くに利益が還元さ

れることを明確にしながらか進めていくという傾向が明らかになり、平等規範が開発実践のなかにも組み込まれ、地域の底上げを支えていることが示唆された。(雑誌論文⑦⑨、図書③、学会発表⑥)

以上のことから、とくに定性的な部分において、従来の評価手法では明らかにならなかった側面が見出され、今後、地域住民が内発的に外部アクターと協働しながら自らが望む活動を展開することが示唆された。すなわち、「副次効果」への着目が、地域の内発的発展をとらえる視点につながることを実証的に明らかにした。

また、3年間の研究の総まとめとして、現地住民、タンザニア研究者を交えて、小規模な国際ワークショップをおこなった。現地の関係者・関係諸機関へ配布するために成果報告書をスワヒリ語でまとめた(雑誌論文①)。

なお、本研究は、一農村とその周辺の事例に焦点を当てたものであったので、事例の比較を今後の課題とする。事例の比較を進めることによって、副次効果の多様な表れ方について理解を深め、東アフリカ農村において広く活用できる開発実践モデルの構築につなげていくことを目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

論文・著書・紀要等

- ① Kurosaki, R., Mhando, D., Araki, M. and Nindi, S. (ed) 2012. "Warsha: Mpango wa kutembeleana Kindimba na Kitanda" (現地国際ワークショップ成果報告書、スワヒリ語)。
- ② 黒崎龍悟 2011. 「学界通信：フォーラムの趣旨と第4回のテーマ(2010年度アフリカ学会学術大会・地域開発フォーラム報告)」『アフリカ研究』78: 61-62. (査読有)
- ③ 黒崎龍悟 2011. 「学界通信：タンザニア農村における内発的な水道事業の展開—複数の農村開発のインパクトとの関連から—(2010年度アフリカ学会学術大会・地域開発フォーラム報告)」『アフリカ研究』78: 74-77. (査読有)
- ④ Kurosaki, R. 2010. "Endogenous movements for water supply works and their relationships to rural development assistance: The case of the Matengo Highlands in southern Tanzania" African Study Monographs 31(1): 31-55. (査読有)
- ⑤ 佐藤孝宏、和田泰三、黒崎龍悟 2010.

「地球圏・生命圏・人間圏の世界地図—生存基盤指数の構築に向けて—」Kyoto Working Papers on Area Studies No. 89 (G-COE Series 87), p103.

- ⑥ 黒崎龍悟 2010. 「タンザニアにおけるコーヒー市場の自由化と農地利用の変化」『人間環境論集』10(2): 35-46. (査読有)
- ⑦ 黒崎龍悟 2010. 「タンザニア南部における農村開発の展開と住民の対応—住民参加型開発の「副次効果」分析から—」『アフリカ研究』77: 31-44. (査読有)
- ⑧ 黒崎龍悟, 伊谷樹一. 2009. 「住民参加型開発の「副次効果」」『科学研究費補助金(基盤研究S)研究成果報告書: 地域研究を基盤としたアフリカ型農村開発に関する総合的研究』, 397-415.
- ⑨ 黒崎龍悟. 2009. 「農民グループ協議会の形成過程」『科学研究費補助金(基盤研究S)研究成果報告書: 地域研究を基盤としたアフリカ型農村開発に関する総合的研究』, 417-435.

[学会発表] (計12件)

- ① 黒崎龍悟 2011. 「タンザニア農村における小水力発電の試み: 在来技術の地域間移転を目指して」福岡NGOネットワーク倶楽部 FUNN12月 於福岡NGOネットワークオフィス, 12月.
- ② Kurosaki, R. 2011. "Historia ya kijiji cha Kitanda" Warsha ya kutembeleana Kindimba na Kitanda, Mbinga, Tanzania, 2nd Sep. Ofisi ya Kata ya Kitanda (スワヒリ語による発表)。
- ③ 黒崎龍悟 2011. 「タンザニア農村における住民参加の〈デモクラシー〉—農民グループの再編成と普及システムの形成を事例に—」民族学博物館共同研究「アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学—参加・運動・ガバナンス」第5回研究会 於国立民族学博物館, 6月.
- ④ 黒崎龍悟 2011. 「タンザニア農村の一時漂泊者」日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センター小研究会「「場」から拓く支援とフィールドワーク」於日本福祉大学, 3月.
- ⑤ 黒崎龍悟. 2010. 「第4回地域開発フォーラム・趣旨説明」日本アフリカ学会第47回学術大会於奈良県文化会館, 5月.
- ⑥ 黒崎龍悟. 2010. 「タンザニア農村における内発的な水道事業の展開—複数の農村開発のインパクトとの関連から—」日本アフリカ学会第47回学術大会「地域開発フォーラム」於奈良県文化会館, 5月.

- ⑦ 黒崎龍悟. 2010. 「タンザニア農村における農民グループ協議会の形成をめぐる諸相」九州人類学研究会 於九州大学, 7 月.
- ⑧ 黒崎龍悟 2010. 「タンザニアにおける農村開発の展開と人びとの取り組み」京都大学アフリカ地域研究資料センター公開講座「解るアフリカ：アフリカ研究最前線」第 5 回 於京都大学アフリカ地域研究資料センター, 2 月.
- ⑨ 黒崎龍悟 2010. 「開発をめぐる地域社会の動態と研究者の役割—タンザニアでのフィールドワークからの着想」長崎大学国際戦略本部国際連携セミナー 於長崎大学, 2 月.
- ⑩ 黒崎龍悟 2010. 「住民参加のデモクラシー」民族学博物館共同研究「アジア・アフリカ地域社会における〈デモクラシー〉の人類学—参加・運動・ガバナンス」第 2 回研究会 於国立民族学博物館, 2 月.
- ⑪ 黒崎龍悟 2009. 「地域発展に向けた住民主導の活動—タンザニア南部の農村から」京都府国際センターNPO 等との国際協働事業「アフリカ理解講座」於京都府国際センター, 8 月.
- ⑫ 黒崎龍悟 2009 「農村開発実践の副次効果と内発性の発現プロセス」国際開発学会第 20 回全国大会 於立命館アジア太平洋大学, 11 月.

〔図書〕(計 3 件)

- ① 黒崎龍悟. 2011. 「タンザニア農村の一時漂泊者」小國和子・亀井伸孝・飯嶋秀治編『支援のフィールドワーク』世界思想社, 206-221.
- ② 伊谷樹一・黒崎龍悟. 2011. 「ムビンガ県マテンゴ高地の地域特性と JICA プロジェクトの展開」掛谷誠・伊谷樹一編『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会, 285-300.
- ③ 黒崎龍悟. 2011. 「住民の連帯性の活性化—開発プロジェクトにおける〈副次効果〉とその〈増幅作用〉」掛谷誠・伊谷樹一編『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会, 324-348.

〔その他〕

- ① 黒崎龍悟 2010. 「新刊紹介：松園万亀雄・縄田浩志・石田慎一郎編著『みんなく実践人類学シリーズ第 2 巻—アフリカの人間開発：実践と文化人類学』(明石書店 2008 年) 『JANES ニュースレター』 18: 33.

ホームページ等

<http://fieldnet.aacore.jp/wiki/%E5%88%A>

9%E7%94%A8%E8%80%85:%E9%BB%92%E5%B4%8E%E9%BE%8D%E6%82%9F/%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%82%B6%E3%83%8B%E3%82%A2/%E7%A7%91%E7%A0%94%E8%B2%BB%E8%8B%A5%E6%89%8BB

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒崎 龍悟 (KUROSAKI RYUGO)
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：90512236